

「有（輪廻）の十二支分を考察する第二十六章」

章の著述それぞれの意味を説く>縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方> [章の著述を説く]

ここで

『依拠し関係して起こる（縁起生である）もの、それは空性であると説かれる。それは依拠して名付けられるもので、まさしくそれが中の道である。』¹

と説かれたけれど、『空性の』と述べられたもの、その縁起性とは何であるか。」と言う。

一様相においては、「このように

『縁起生を見る者が、苦と、集と、滅と、道の、それらそのものを見るのである。』²

と説かれたその縁起性を、如何に理解するか。」という。

章の著述を説く>順次の縁起> [放つものの因果]

それ故に、その支分の良き分類を述べようと約されて、このように、

無明が覆い隠したことによって、再びの輪廻の為に、
三様相の諸行を、
顕現して行うものである
それらの業によって、衆生へと赴く。 1

と説かれた。そこで、無明とは無知であり、闇であり清浄を如何に視るか（如実）を覆い隠すものである。

その無明が覆い隠し、塞がれたプトガラ³が、再びの有（輪廻）の為に一再度の有の意味（目的）と、再度の有を起こす為に、善等の諸々の思念を顕現して集め為し、生じさせる。それらの行は、再度の有を顕現して集め行う（造作する）ので、行である。それらも三様相であり、善と不善と不動である。あるいは、身体のもの、言葉のもの、心のものである。

無明が覆い隠したプトガラが業の性相を持つ三様相の行を為すが、顕現して行うので、行である業—それら業の名を持つものによって、その因によって起こった（輪廻の）衆生へと赴くことになる。

そしてその

¹ 『依拠し…である。』：『根本中論』第 24 章 18 偈。

² 『縁起生…である。』：『根本中論』第 24 章 40 偈。

³ プトガラ：心身の集積に名付けられた「者」。

行の縁を持つ識は、
諸衆生へと入り込むことになる。

行いを為し、(業を) 積んだそのプトガラ、(望む) 意味ではない輪廻の種子となった、行の縁を持つ識は、行に合った衆生へと天 (の衆生) 等に入りー完全に入り込み、生まれるとなる。

それから、後に

識が入ったとなれば、
名と色になることになる。 2

それは、業と煩惱によって染み付けられたことによって、それやその生所へ導いたので「名」という。あるいは、意味 (目的) に対して名前の力によって動くので「名」ー有形ではない四蘊⁴を「名」と呼称する。参照されるに適うので「色」ー「害され得る」という主旨である。この「色」と、先の「名」のこれら二つを合わせて、「名色」と設ける。そこで、色形とその映像のあり方で、最後に死の諸蘊が滅したならば、ただ一瞬間で天秤棒の (左右の) 高低の様子で、生の部分の諸蘊が、業が放ったように生じることになる。それ故に、そのように母の子宮において識が成長したならば、識の縁を持つ名色となり、「汚染され起こるとなる。」という意味である。

もし、衆生へと識が成長するとならなければ、その時は名色が起こるとはならず、

「阿難よ。その識は、もし母の子宮へ入ったとなっていなければ、その時、その羯邏藍⁵は、羯邏藍そのものとして成立するとはならない。」と説かれる故である。それ故に、そのようであれば、

名と色になったならば、
六處が起こることになる。

苦しみの生起にとって、まさしく起こさせるもの (因) となった故に、生じる門の事物そのものによって「眼と耳と鼻と舌と身体と意」という名色の因を

⁴ 四蘊：受蘊 (感受作用の集積)、想蘊 (識別作用の集積)、行蘊 (他の四以外の行い等の集積)、識蘊 (心王 (知覚作用において観察者として見ている部分) の集積。六識ある。)
色蘊 (形のある身体の集積) を加えて五蘊になる。

⁵ 羯邏藍：胎児が子宮の中で成長する際の状態の一つ。

持つ、六處が生じるとなる。「それによって眼が諸々の色形を見て、心意は楽な（快い）所へと顕かに執することになる。」等によって、六處とは、苦しみが起こる、生じる門そのものである。

それ故に、その様に六處が起こることで、後時、

六處に依拠して、
触が正しく起こるとなる。 3

「この触も何であり、如何様に生じるのか。」といえは。

(それを) 示す為に、

眼と色形と念じるものに、
依拠して生じるのみであり、
そのように眼と色形に依拠して、
識が生じるとなる。 4
眼と色形と識の、
三つが集まったもの。
それが触である。

と説かれた。そこで、眼と色形と、念じるもの—作意、境（対象）等とは異なる識の種子となった等無間縁⁶に依拠して、眼の識が生じるのである。そこで、眼と色處は色（物質）である。四蘊の性相を持つ「念じるもの」は名であり、それ故に、この三つに依拠して生じるその眼識は、名と色に依拠して生じるのである。それ故に、これら根（感覚器官）と境と識の三つが集まったもの—緒に生じ、互いに結ばれることによって類似して介入したことが、触の性相である触である。

それから後時、

・・・・その触より、
受が全く起こるとなる。 5

好ましい・好ましくない・両方を斥けた（平等な）対象を経験する、対象の経験を知覚することによって感受するので「受」といい、楽と苦と、楽でもな

⁶ 等無間縁：知覚が、ただ明らかであり、知るものとして生じる主要な質的原因。

く苦でもないものである。色（物質）と識（知覚）と眼のこれら三つを集めた性相を持つ触に依拠して、受であると斯くも説かれた如く、残りの根と境と識の三つを集めた性相の、触の因を持つ受も説かれたと知りたまえ。

順次の縁起> [成すものの因果]

それから後時、

受の縁によって愛であり、

「全く起こることになる。」と連なる。或る愛に、受である縁が有ることを、「受の縁によって」という。その愛も如何なる（対象を持つ）認識主体であるかといえ、まさしく受を対象にする認識主体である。何故かといえ、何故ならば、その愛を持つ者は

受の為に愛すとなる。

「受の為に、顕現した欲望を生じさせる。」という意味である。

「如何様に」といえば、

先ずもし、そこに楽である受（感受）が生じたならば、それは再々それと離れぬように望む（愛す）となる。仮に苦が生じたならば、その時それと離れる為に望む（愛す）となる。あるいは楽でもなく苦でもないものが生じたならば、それが衰えないように、有⁷となり、そのようであれば、受の意味（目的）として愛すとなる。

それはそのように、

愛となれば取。

四様相の取となる。 6

そのように、諸々の受を顕かに欲し執着するものは、愛である縁を持つ業が成長する因となる欲と、見解と、持戒と禁戒と、我を語るといふ四様相を尽く保持するとなり、それは、その愛である縁によって取るのである。

それから後時、

⁷ 有：「有」srid と書かれているが、「望む（愛す）」sred か？

取が有れば、取る者の
有がよく起こるとなる。
もし、取が無ければ
解脱するとなり、有にはならない。 7
その有も五蘊である。

斯くも説かれた四様相の取の、取る者—保持者を生まれさせるものである。その取る者の取である縁によって有が生じるとなる。何故かといえば、何故ならば、もし、或る取る者が感受に対する愛を生じさせておらず、妙観察⁸の力によって愛を我がものとしておらず、四取⁹を捨て去って、汚れ無い二元の無い智慧¹⁰を実現したことより取が無くなったならば、彼は解放されたとなり、その時その有は有るとはならない。

その有も何かといえば、

「その有も五蘊である。」

—近く取ることよりよく起こるものは、五蘊の本性であると知りたまえ。身体と言葉と意の三様相の業も、これより未来の五蘊が起こるので「有」と名付けた。そこで、身体と言葉の業は色蘊の本性であるが、意の業は四蘊の本性であり、そのようであれば「その有は五蘊である。」と知りたまえ。

その有より生が起こる。

—未来の蘊が起こることが生であるが、それも有よりよく起こる。

それから後時、

老死と、悲痛と、
慟哭と、苦と、 8
心不楽と、混乱等、
それらは生より、よく起こる。

生である因を持つそれら老死等が起こることになる。

それらの説明は、経典にあるがままに知るべきであり、そこで「老とは、蘊

⁸ 妙観察：「それぞれを悟る」の意味。それぞれを明らかに知ること。

⁹ 四取：「取」は来世の蘊を取らせる強い欲望。四種に分類される。

欲取（欲望に関わる取）・見取（見解に関わる取）・戒禁取（誤った修行の取捨に関する取）・我語取（我と我がものに関する取）。

¹⁰ 不二の智慧：空性を直覚する瞑想状態の意識。

が尽く熟すことである。死とは、老いた蘊が壊れることである。悲痛とは、行き、死につつある全く蒙昧な顕現した執着と共にある心の苦痛である。慟哭をあげるとは、悲痛が動機となった言葉を述べることである。苦とは、五根を傷つけることである。心不樂とは、不快が降りかかることである。混乱とは、多くの苦と心不樂が起こることである。」という。

それ故に、そのように斯くも説かれたさまで、

そのように苦の蘊、
このただそれだけが、起こることになる。 9

「そのように」とは、「ただ因と縁の力によって」という意味である。「苦の蘊」とは、苦の集合や群であり、「苦を積み上げた」という主旨である。「ただそれだけ」とは、「我と我所¹¹の本性と離れた」という意味と、「楽と混合していない苦の我性である、幼い者が考察しただけのもの」という主旨である。

章の著述を説く > [逆行の縁起]

何故ならば、そのように無明等より有（輪廻）の諸支分が起こる故に、

輪廻の根本は行であり、
それ故に、賢者達は行をなさない。
それ故に、不賢の者は行為者である。
賢者は、真如を見る故である。 10

そこで、識等が入り込む性相を持つ輪廻の根本—主要な因は諸行であり、それ故に不賢の者は、輪廻の根本である諸行を行う。(何故ならば)

「比丘達よ。無明に関係する者であるプトガラは、福德が顕現せられることも顕かに行う。福德でないものが顕現せられることも顕かに行う。不動が顕現せられることも顕現して行う。」

と、世尊によって説かれた故である。

何故ならば、そのようであれば、不賢の者は行為者である故に、無明を具えたプトガラのみが諸行の行為者となるが、無明を捨て去った真如を見る賢者においてはそうではない。何故かといえば、

「真如を見る故である。」

—真如を見るならば一切の事物は認識されないので、それを認識して業を為すことになる対象は、僅かにも有るのではない。それ故に、まさしくそれを見る

¹¹ 我所：我がもの。

故に、賢者は行為者ではない。

何故ならば、そのように無明が有れば諸行は起こるが、無ければ起こらぬ故に、

無明が滅したとなれば、
全ての諸行は起こるとはならない。

(何故ならば) 因が揃っていない故である。

「その無明は何より滅すとなるのか」といえば、

無明が滅したとなれば、
知が真如を修したことによってである。 11

縁起生そのものを誤り無くあるがまま(如実)に修したことによって、無明を良く捨て去ることになる。

このように縁起生を正しく見る者は、微細な事物であろうとも自らの本質を認識するのではない。(何故ならば) 映像のように、諸事物は本性がまさしく欠如していると観入する故である。それはそのように、一切事物は本性がまさしく欠如すると観入したので、法(現象)を僅かにも認識するとはならない。その者は認識していないので、何にも蒙昧とはならない。蒙昧でないので業をなさない。

そのようであれば、縁起生を修したことによって真如に入ることになるが、真如を見る瑜伽行者の無明は確実に捨て去られるとなる。無明を捨て去ったことによって、行は滅すとなる。そのように無明が滅したことによって諸行が斯くも滅すが如く、

それやそれが滅したことによって、
それやそれは実現しない。
苦の蘊ただそれだけのもの。
それは、そのように正しく滅す。 12

「前々の支分が滅したことによって後々の支分が滅すとなる。」と知りたまえ。

この次第によって、本性が欠如する、行為者や感受者と離れた、我と我所等の正しくない見解と離れた、苦の集積である瑜伽行者の苦の蘊は再度起こらぬので、正しく滅すとなる。

縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方> [経証と合わせる]

斯くも『聖稻稗経』より、

「その如く、内の二つの縁起生の故に起こる。二つは何かといえ、これであり、因と関わるものと、縁と関わるものである。

そこで、因と関わる内の縁起生は何かといえ、これは、無明の縁によって諸行。行の縁によって識。識の縁によって名と色。名と色の縁によって六處。六處の縁によって触。触の縁によって受。受の縁によって愛。愛の縁によって取。取の縁によって有。有の縁によって生。生の縁によって老死と、悲痛と、慟哭と、苦と、心不樂と、混乱等が起こり、そのようであれば、苦の大きな蘊ただそのみが起こるとなるだろう。

もし無明が起こっていないければ、諸行も顕現しないものである。その如く、既に生が生じていなければ、老死まで顕現しないものであるが、しかしながら無明が有ることより諸行が顕現して成立すると、その如く生があることより老死まで顕現して成立すると。

そこでも、無明もこう『我が諸行を実現する。』とは思わない。諸行も、こう『我らは無明によって実現された。』とは思わない。それからその如く、生も『我が老死を実現する。』と思わず、老死も『我は生によって実現された。』と思わぬまでである。

しかしながら無明が有ることより諸行の実現が起こるとなることから、その如く、生が有ることより老死まで実現し起こるとなる。そのようであれば、内の縁起生は因と関係すると見たまえ。

内の縁起生が縁と関係すると如何様に見られるのかといえ、六要素が集まった故であり、六要素の何が集まったかといえ、このように、『地と水と火と風と虚空と識の要素が集まったことより、内の縁起生は縁と関係する』と見たまえ。

そこで内の縁起生の地の要素とは何かといえ、これが集まって身体の硬い事物を顕現するものが、『地の要素』という。身体を纏める働きを成すこれは、『水の要素』という。身体の、食べたり飲んだり嚙んだり味わったものを消化するこれは、『火の要素』という。身体の息が内外に動く働きをするそれを、『風の要素』という。身体の中の空間を存在させるこれを、『虚空の要素』という。^{さんきやくはさ}三脚稻架のあり様で名と色を顕現して成す識の五つの集合が集まったものと、有漏¹²の意識であるこれは、『識の

^{うろう}12 有漏：輪廻に落ちる性質と共にあること。

要素』という。それらの縁無くして身体が生じるとはならないが、内の地の要素が揃い、その如く地と水と火と風と虚空と識の諸要素も揃ったとなり、一切が集まったことより身体が顕現して成立するとなる。

そこで、地の要素も、こう『我が集まって身体の硬い事物を実現する。』と思わない。水の要素も『我が身体を纏める働きをしよう。』と意図しない。火の要素も『我が身体の食べ、飲み、噛み、味わったものを消化しよう。』とは思わない。風の要素も『我が身体の息を内外へと動かす働きをしよう。』とは思わない。虚空の要素も『我が身体の中の空間を存在させよう。』とは思わない。識の要素も『我が身体の名と色を実現しよう。』とは思わない。身体も『我はこれらの縁によって生じさせられた。』とも思わぬが、しかしながらこれらの縁が有れば身体が生じるとなる。

そこで、地の要素は、我ではなく、有情ではなく、命者¹³ではなく、生者ではなく、意生¹⁴ではなく、儒童¹⁵ではなく、女ではなく、男ではなく、中性者ではなく、私ではなく、我所ではなく、他の誰でもない。その如く、水の要素と、火の要素と、風の要素と、虚空の要素と、識の要素も我ではない。有情ではない。命者ではない。生者ではない。意生ではない。儒童ではない。女ではない。男ではない。中性者ではない。私ではない。我所ではない。他の誰でもない。

そこで、無明とは何かといえ、これら六處そのものを何か単一であると想うことや、一塊と想うことや、恒常であると想うことや、安定堅個であると想うことや、永遠であると想うことや、楽であると想うことや、我であると想うことや、有情であると想うことや、命者であると想うことや、生者や、養者や、士夫や、プトガラであると想うことや、意生や、儒童であると想うことや、『私』や『我である』と想うことであり、このような、この様々な様相の無知を『無明』という。

そのように無明が有るので、諸々の対象へ貪欲や瞋恚や愚痴が向かい入り、そこで諸対象に対する貪欲と瞋恚と愚痴であるこれを、『無明の縁によって諸行』という。

事物をそれぞれに様相として知覚するのは、識である。

識と一緒に起こる、有形ではない、それら近取の四蘊は名であるが、四大構成要素とそれらを因としたものは色であり、その名とその色を一つに収めたものが名色である。

13 命者^{みょうしや}：非仏教徒が我であるとする「者」の一つ。

14 意生^{いしやう}：同上。

15 儒童^{じゆどう}：同上。

名色に依拠した諸根（感覚器官）は、六處である。

三つ集まったことは触である。

触を経験することが受である。

受に執することが愛である。

愛を増強したものが取である。

取より生じた、再度の生を生じさせる業が有である。

その因より蘊が生じたことが生である。

生れて蘊が熟すことが老である。老いて蘊が壊れることが死である。

死につつあり昏迷し、顕現した執着と共にある内的な全くの苦痛が悲痛である。悲痛より起こった言葉として言うことが慟哭である。五識¹⁶の集合と相応する知覚の不楽を経験することが苦である。心意と相応する知覚の苦が、心不楽である。他にもこれらのような、それらの随煩惱であるものを『混乱』という。

そこで、大きな闇である故に、無明である。顕現して集まり行う故に、諸行である。様相として知覚する故に、識である。互いに依拠した故に、名と色である。生じる門である故に、六處である。触れる故に、触である。経験する故に、受である。渴望する故に、愛である。近く取る故に、取である。再度有を生じさせる故に、有である。蘊が起こる故に、生である。蘊が熟す故に、老である。壊れる故に、死である。悲痛にする故に、悲痛である。言葉で言う故に、慟哭である。身体を害する故に、苦である。心を害する故に、心不楽である。煩惱である故に、混乱である。

あるいは、真如を了解せず誤って知り、知らぬことは無明である。

そのように無明が有れば、三様相の行が顕かに成立する。福德へ近く行くものと、福德でないものへ近く行くものと、不動へ近く行くものである。

そこで、福德へ近く行く諸行より福德へ近く行く識そのものになり、福德でないものへ近く行く諸行より福德でないものへ近く行く識そのものになり、不動へ近く行く諸行より不動へ近く行く識そのものとなるこれを、『識』という。

識の縁によって『名と色』というが、受（蘊）等有形ではない四蘊は、それやその愛へと落ちるので、名である。色蘊と一緒に『名と色』というので、『名と色』という。

名と色を尽く増強することによって、六處の門より諸々の行為を為す

¹⁶ 五識：五感を知覚する識。眼識・耳識・鼻識・舌識・身識。

ことが起こり、それを『名色の縁によって六處』という。

六處より六つの触の集合が起こり、それを『六處の縁によって触』という。

斯様に触が起こったように受が起こり、それを『触の縁によって受』という。

それらの受の部分を経験することと、顕かに好むことと、殊更に愛着することと、殊更に愛着して入り込むことは、『受の縁によって愛』という。

経験することと、顕かに好むことと、殊更に愛着することと、殊更に愛着して存在することより、『我が好ましい本質や、楽の本質と離れませんように。』と手放さぬ為に祈願するこれを、『愛の縁によって取』といい、愛する対象であるその事物を集積し成し遂げる為に近取を取り、それやその為に祈願する。

そのように祈願し、再度の有が生じさせられる、身体と言葉と心が動機となる業を、『取の縁によって有』という。

その業より生じた諸蘊が顕現して成立することを、『有の縁によって生』という。

生を顕現して成す諸蘊の増強が完全に熟すことと、壊れることを、『生の縁によって老死』という。

そのように、これら縁起生の十二支分は、他々なる因より起こり、他々なる縁より起こり、恒常ではなく無常ではなく、有為でなく無為でなく、無因でなく無縁でなく、経験者が有るのではなく、尽きる法（現象）ではなく、壊れる法（現象）ではなく、滅す法（現象）ではなく、無始の時から入り込み、途絶えることなく川の流れの如く累々と入り込んだ。

それら縁起生の十二支分は、他々なる因より起こり、他々なる縁より起こり、恒常ではなく無常ではなく、有為でなく無為でなく、無因でなく無縁でなく、経験者が有るのではなく、尽きる法（現象）ではなく、壊れる法（現象）ではなく、滅す法（現象）ではなく、無始の時から入り込み、途絶えることなく川の流れの如く累々と入り込みはしたけれども、しかしながらこれらの四支分は、縁起生のそれら十二支分を収める故に、因となる。

（その）四支分はなにかといえば、これであり、無明と愛と、業と識である。そこで識とは、種子の本性そのものである因を為す。業は、田畑の本性である因を為す。無明と愛は、煩惱の本性である因を為す。

業と煩惱によって、種子である識が生じさせられる。そこで業とは、

種子である識の畑の働きを為す。愛が、種子である識を潤す働きを為す。無明が、種子である識を植え、これらの縁が無ければ種子である識が顕現して成立するとはならない。

そこで業も、こう『我が種子である識の畑の働きを為そう。』と思わない。愛も『我が種子である識を潤そう。』と思わない。無明も『我が種子である識を植えよう。』と思わない。種子である識も『我はこれらの縁によって生じさせられた。』と思わない。

しかしながら種子である識は業の畑に依拠し、愛の湿潤によって潤され、無明によって良く植えられたことより生じるならば、それやその生まれる所に受胎すれば、母の子宮において名と色の芽を顕現して成す。

その名色の芽も、我が為しておらず他が為しておらず、自他二者が為しておらず、自在天が為しておらず、時が変化させておらず、本性より起こっておらず、一因に頼るのでなく、無因よりも生じていない。しかしながら父母が会合し、月経を具え他の縁も集まったならば、虚空に等しい、執すること無く我がものとして無い、所有者の無い法（現象）は、幻の性相である本性において諸々の因縁が揃っていないことが無い故に、それやその生まれる所へ受胎するならば、母の子宮において経験を味わうことのできる種子である識は、名と色の芽を顕現して成す。

このように、眼の識は五因より起こる。五は何かといえ、こうであり、眼に依拠したことと、色形と、光と、虚空と、それが生じさせられる作意にも依拠して眼識が起こる。そこで眼は、眼識の拠所の働きを為す。色形は、眼識の対象の働きを為す。光は、顕かにする働きを為す。虚空は、遮らない働きを為す。それを生じさせる作意は、思う働きを為す。

それらの縁が無ければ眼識は起こるとはならないが、或る時に眼の内處である眼が不備とならず、その如く色形と光と虚空とそれを生じさせる作意が不備とならず、一切が集まったそれより眼識が起こるとなる。

そこで眼は、こう『我が眼識の拠所の働きを為そう。』と思わない。色形も『我が眼識の対象の働きを為そう。』と思わない。光も『我が眼識の顕かにする働きを為そう。』と思わない。虚空も『我が眼識の遮らない働きを為そう。』と思わない。それを生じさせる作意も『我が眼識の思の働きを為そう。』と思わない。眼識も『我はこれらの縁によって生じさせられた。』と思わず、しかしながらこれらの縁が有ることより眼識は生じるとなる。

その如く、残りの根（感覚器官）と共にある諸々もそれぞれの場合に合わせる。

そこで、如何なる法（現象）もこの世間よりあちらの世間へと勿論移行はしないけれども、諸々の因と縁は不足が無い故に、業の果として顕現も有る。

このように、例えば良く拭いた鏡面に顔の映像が映ることも、勿論顔は鏡面に移っていないけれども、因と縁は不足が無い故に、顔としての顕現も有る。その如く、ここからも誰も死に移ることは無いが、他にも生まれておらず、諸々の因と縁は不足が無い故に、業の果としての顕現も有る。

このように、例えば月輪は四万由旬の上を行き、しかしながら水で満ちた小さな器に月輪の映像が映ることも、月輪はそのありかより移らず、水で満ちた小さな器の中に来たのでもないけれども、諸々の因と縁は不足が無い故に、月輪としての顕現も有る。その如く、ここからも誰も死に移ることは無いが、勿論他へと生まれてはいないけれども、諸々の因と縁は不足が無い故に、業の果としての顕現も有る。

このように、例えばその火は因と縁が揃っていないければ燃えないけれど、因と縁が集まることより燃える。その如く、幻の性相の本性であり、虚空と等しく、執すること無く、我がもの無く、所有者の無い法（現象）において、諸々の因と縁は不足が無い故である。

それやその生まれる所へ受胎するならば、母の子宮において、種子である識は、諸々の業と煩惱によって生じさせられた名と色の芽を顕現して成し、そこで内の縁起生は五つに見られる。五は何かといえば、恒常としてではないことと、断滅としてではないことと、移行するものとしてではないことと、小さな因より大きな果が起こることと、それに類似した継続としてである。

『如何様に恒常としてではないのか』といえば、何故ならば最後に死ぬ諸蘊も別他であるが、生の部分に結ばれる諸蘊も別他であり、最後に死ぬ諸蘊であるもの自体が生部分に結ばれるものではないが、最後に死ぬ諸蘊も滅したまさしくその時に、生の部分に結ばれる諸蘊が起こるので、それ故に恒常としてではない。

『如何様に断滅としてではないのか』といえば、最後に死ぬ時の諸蘊が先に滅したもものから、生の部分に結ばれる諸蘊が起こるのではないが、滅していないものからでもない。しかし、最後に死ぬ諸蘊も滅したが、まさしくその時に生の部分に結ばれる諸蘊が、天秤棒の（左右の）上下の如く起こるとなり、それ故に、断滅としてでもない。

『如何様に移行ではないのか』といえば、異なった種類の諸衆生が、同

類の生へと生まれることを実現しないことである。それ故に、移行するものとしてでもない。

『如何様に小さな因より大きな果が起こるのか』といえ、小さな業を為したことより異熟した大きな果を経験し、それ故に、小さな因より大きな果が起こるのである。

経験することになる業を為したように、経験するとなる異熟を経験する故に、『それに類似した継続としてである。』

と、詳細に説かれた如くである。

縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方> [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「有（輪廻）の十二支分を考察する」という第二十六章の解説である。